

半歩遅れの

読書術

森本 あんり



「半歩遅れ」というこのコラムの最後に、どうしても取り上げたい本があった。それは、マイケル・サンデルの『実力も運のうち』（鬼澤忍訳・早川書房）である。原題は「能力主義の専制」で、2020年に出版され、今春邦訳されている。著者はいわずと知れた熱血教室の哲学教授だが、何とこの本は、わたしがかつこ数年来書き続けてきたことをそっくりそのまま書いているのである。

もちろん、ハーバードの大先生がわたしの日本語の本をパク

った、と言いたいわけではない。だが、同書を読んでわたしは少なからず動揺した。たまたま論旨が同じだった、ということならよくあるだろう。しかし今回は、論旨を支えるために引用した古典文献も同じだし、その土台に前提した神学的な枠組も同じである。というより、出発点と経路が同じなら、そこから引き出される結論が似てくるのは当然かもしれない。彼我の発信力の違いに愕然としたが、しかたがない。少なくとも自分は半

M・サンデルの話題作、実はわたしも…

能力主義めぐるもう一つの本

歩遅れではなく、彼の一步先を読んで書いていたのだ、とひそかに胸を張ることにした。

なぜ昨今の欧米でトランプ支持者やポピュリスト的なナショナリズムが跋扈するのか。サンデルはそれに答えて、グローバル化による敗者の憤懣を挙げ、能力主義は不公平を助長し、敗者に屈辱感を与え、しかもその格差は正義だと信じさせる。そして勝ち組は、自分たちが彼らを侮辱し続けていることに気づかない。リベラルな知的エリートがトランプ現象を理解できないのも、ここに原因がある。

こうした今日的な結末の背景には、自由意志をめぐるアウグスティヌスとペラギウスという2人の古代教父による神学論争があり、悪を罰し善に報いるという神人関係の聖書的な契約理解がある。ルターやカルヴァンは徹底して反能力主義だったが、恩寵や予定という彼らの論理はやがて逆回転を始め、マックス・ウェーバーが説く苦難と幸福の神義論を基礎づけることになる。その弊害が特に目立つのは、ピューリタンの道徳主義を受け継いだアメリカである。かくしてキリスト教は「富と繁栄の福音」と化し、トランプはその大祭司となった――。

こうして要約してみると、果たしてそれがサンデルの議論だったのか自分の議論だったのか、見分けがつかない。もし一方の本で飽き足らなかつたら、ぜひもう一方の本を繙いてみていただきたい。

(神学者)